全国老施協常任顧問・理事
そのだ修光・参議院議員

特別対談

テクノロジー等を活用し介護現場を元気にしていく

宮田裕章×そのだ修光

慶應義塾大学医学部
医療政策・管理学教室教授

全国老施協常任顧問・理事
参議院議員

今回は、全国老施協の理事に新たに就任された慶應義塾大学医学部医療政策・管理学教室教授の宮田裕章氏をお招きし、今後の展望などについてお聞きしました。医療・介護へのIOT・AI導入にも積極的な宮田先生ですが、どのようにお考えなのでしょうか。

そのだ　宮田先生はこれまで、どのような研究をされてきたのですか。

宮田　科学的アプローチを使って医療の現場を改善していくことを専門にしています。臨床医と連携しながら医療の質をどう良くしていくか、国や自治体・企業と組んで社会に役立つ新サービスをどう生み出していくか、といったことに取り組んできました。

そのだ　介護の現場に携わる我々も、役所や利用者の方から「介護の質を高めてください」という要請を受けています。そうしたなか、先生に介護の分野にもかかわっていただけるということで、大変心強く思います。日本は高齢社会先進国ですが、どのように課題に取り組んでいくべきと先生はお考えでしょうか。

宮田　先進国のうち、少子高齢化、人口減少、経済成長の鈍化のすべてが進行しているのは日本だけです。団塊の世代を中心にこれから介護・医療への短期的な需要が大きくなっていくなか、解決しなければならない問題もますます増えていきます。展望なく消費していくだけでは支え手は少なくなる一方で、社会保障システムを支え切れない時代を迎えます。そうしたことが起こらないようにするには何が必要かを考え、介護現場の方たちと共に形にしていく必要があるでしょう。

そのだ　団塊の世代が75歳を迎える2025年には、介護人材があと38万人必要になるという試算があります。現在でも担い手不足は切実な問題です。何か良い案はないでしょうか。

宮田　重要なのは、現場の方々が元気になれるような働き方の提案です。介護職員が、利用者に寄り添い、最後までその人らしい生き方に伴走できたかどうかなど、価値のある介護を提供し、その仕事が正当に評価されることが大事です。それをきちんと把握し、国に見せていくことで、たとえば加算を得るなど、介護現場が報われる制度づくりをしていかなければなりません。また、排せつ管理や見守り、AIを活用した健康状態の予測、介護ロボットを使った要介護者・介護職員の負担軽減など、テクノロジーの応用をより進めることも必要でしょう。

そのだ　公益の団体である全国老施協として、日本の新たな価値を創造・創出するために、先生の力をぜひお貸しいただければと思います。よろしくお願いいたします。

さらに詳しく知りたい方は、ホームページにアクセスしてください。
そのだ修光　検索　または、https://sonodashuko.com/
公式LINEアカウント：
https://page.line.me/psd1500s
LINEの「友だち追加」より
友だち登録お願いします！